

[B年] 待降節第3主日(2023年12月17日)**【旧約聖書日課】 マラキ書 3章19～24節**

19 見よ、その日が来る

炉のように燃える日が。
高慢な者、悪を行う者は
すべてわらのようになる。

到来するその日は、と万軍の主は言われる。
彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。

20 しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには
義の太陽が昇る。

その翼にはいやす力がある。
あなたたちは牛舎の子牛のように
躍り出て跳び回る。

21 わたしが備えているその日に

あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。
彼らは足の下で灰になる。
と万軍の主は言われる。

22 わが僕モーセの教えを思い起こせ。
わたしは彼に、全イスラエルのため
ホレブで掟と定めを命じておいた。

23 見よ、わたしは

大いなる恐るべき主の日が来る前に
預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

24 彼は父の心を子に

子の心を父に向けさせる。
わたしが来て、破滅をもって
この地を撃つことがないように。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 4章1～5節**

1 こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。2この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。

3わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。4自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。

5ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。

【福音書日課】**ヨハネによる福音書 1章19～28節**

19 さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、20彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。21彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。22そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」23ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」24遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。25彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、26ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。27その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」

28これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マラキ書3章19～24節

¹⁹ その日が来る。

かまどのように燃える日が。

高慢な者、悪を行う者は

すべてわらになる。

到来するその日は彼らを焼き尽くし

根も枝も残さない——万軍の主は言われる。

²⁰ しかし、わが名を畏れるあなたたちには

義の太陽が昇る。

その翼には癒しがある。

あなたがたは牛舎の子牛のように

躍り出て跳び回る。

²¹ 私が事を行うその日に

あなたがたは悪しき者たちを踏みつける。

彼らはあなたがたの足の裏で灰になる

——万軍の主は言われる。

²² わが僕モーセの律法を思い起こせ。

それは、私がホレブで全イスラエルのために

彼に命じておいた掟と法である。

²³ 大いなる恐るべき主の日が来る前に

わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。

²⁴ 彼は父の心を子らに

子らの心を父に向けさせる。

私が来て、この地を打ち

減ぼし尽くすことがないように。

コリントの信徒への手紙一4章1～5節

¹ こういうわけですから、人は私たちをキリストに仕える者、神の秘儀の管理者と考えるべきです。² この場合、管理者に求められるのは、忠実であることです。³ あなたがたに裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、私は何ら意に介しません。私は、自分で自分を裁くことすらしません。⁴ 私には少しもやましいことはありませんが、それで義とされているわけではありません。私を裁く方は主です。⁵ ですから、主が来られるまでは、何事についても先走って裁いてはいけません。主は、闇に隠れた事を明るみに出し、人の心の謀をも明らかにされます。その時には、神からそれぞれ誉れを受けるでしょう。

ヨハネによる福音書1章19～28節

¹⁹ さて、ヨハネの証しはこうである。ユダヤ人たちが、エルサレムから祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせたとき、²⁰ 彼は公言してはばからず、「私はメシアではない」と言った。²¹ 彼らがまた、「では、何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「そうではない」と言った。さらに、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「違う」と答えた。²² そこで、彼らは言った。「誰なのですか。私たちを遣わした人々に返事ができるようにしてください。あなたは自分を何者だと言うのですか。」

²³ ヨハネは言った。

「私は、預言者イザヤが言ったように

『主の道をまっすぐにせよ』と

荒れ野で叫ぶ者の声である。」

²⁴ 遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。²⁵ 彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアではなく、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うとき、²⁶ ヨハネは答えた。「私は水で洗礼を授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方がおられる。²⁷ その人は私の後から来られる方で、私はその方の履物のひもを解く値打ちもない。」²⁸ これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

- ・12月17日「待降節第3主日」の日課主題は「先駆者」。この日は、古いラテン典礼に基づいて「喜びの主日」とも呼ばれてきた。
- ・旧約聖書日課は、「マラキ書」から、末尾にある「主の日」到来の預言の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、神の裁きについて教える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、洗礼者ヨハネの逸話の最初の箇所。

旧約日課(マラキ3章より)

- ・「マラキ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四に置かれた「十二小預言者」の最後の預言文書。「十二小預言者」は、キリスト教正典では12の別個の預言書として扱われている。本預言書が「マラキ書」と呼ばれるのは、冒頭に著者名らしき「マラキ」の語が置かれているからであるが、これはヘブライ語で「わたしの使者」という意味の語で、3:1「使者」と訳されている語と同じ語である。いずれにしても、「マラキ」と呼ばれる著者について本書は何の情報も示していない。「十二小預言者」中、直前に置かれた「ゼカリヤ書」との関連性も指摘されており、本来は一つの預言書としてのまとまりがあったものが「十二」にするために区分された可能性もある。
- ・日課箇所は、「主の日」の到来を告げる終末的な預言として解されている。ただし、これを「終末預言」と解するのは、これを巻末に配置したギリシア語旧約聖書(七十人訳)の伝統を受け継いだキリスト教で強化された理解であろう。本書を「ゼカリヤ書」と結びつけた預言書として解釈するならば、ここで告げられる「主の日」は、バビロン捕囚後のペルシア支配下でエルサレム(神殿)の再建によって「ユダヤ共同体」の再興に取り組んだ人々が、その事業が遅々として進まない中で、最終的に完成を見るときのことを幻として語り、希望を持って待つよう促しているものと見ることができる。
- ・ここで「主の日」の到来を待つ者に促されているのは、「僕モーセの教えを思い起こ」(22節)すことと、あらかじめ遣わされる「預言者エリヤ」(23節)を受け入れることである。「モーセ」は、正典「律法」で「モーセ物語」として描かれる律法授与者であり、正典「律法」の代名詞としても用いられる名である。「預言者エリヤ」は、正典「前の預言者」中「列王記」の上17章から下2章にかけて描かれる王国時代の伝説的な預言者で、正典「預言者」を代表する預言者の名である。「マラキ書」がユダヤ正典「律法と預言者」全体の末尾に置かれたものであることを考慮すると、ここで提示されていることは、本預言書を含む「律法と預言者」全体を正典として受け入れるよう促すためのものであると解することもできるだろう。「モーセとエリヤ」は、「新約」においても旧約「律法と預言者」を示す比喻表現。
- ・24節前半は、ルカ1:17に引用あり。

使徒書日課(Ⅰコリント4章)

- ・「コリントの信徒への手紙一」は、「使徒パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。パウロが教会設立に携わった「コリントの教会共同体」に宛てて送った一連の書簡の一つで、おそらく初期のもの。「コリントの教会共同体」は、パウロがユダヤ人夫妻アキラとプリスキラをはじめとする「ローマの教会共同体」所属の信者らとの協力で立ち上げたと考えられる。パウロがコリントに滞在した当時は、コリントには相当数のユダヤ人が移住してきていたと考えられる。コリント市内には、いくつものユダヤ会堂が存在しており、パウロらはそこに連なるユダヤ人に働きかける形で「教会共同体」を形成したが、そこには従来からの住人だけでなく他都市からの移住者や一時的滞在者も出入りしていたはずである。ローマの「教会共同体」指導者となっていた使徒ペトロ(ケファ)も指導に訪れ、また、エジプト・アレクサンドリア(の教会共同体)出身とされる宣教者「アポロ」も出入りしていたと考えられる。そのような状況の中で、パウロは、この教会共同体に対して自分こそが第一の指導者であるとの自負を持っていたが、実際には、そこに連なる信者たちから全面的な支持を得られずにいた。そこで生じた軋轢を背景に、パウロ支持者からの報告に応じる形で著したのが、本書簡である。
- ・日課箇所は、この後にパウロが自身を「使徒」として位置づけてその使命が何であるのかを示していくために、前提となる考えを提示しようとしている。パウロはここで、自らを「キリストに仕える者」また「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」と言い表している。「仕える者(ヒューペレーテース)」は、直訳すれば「下位の漕ぎ手」で、「下役」の意。この語は、四福音書および使徒言行録では役人等の「下役」を指して用いられる例があるが(マタイ5:25など参照)、福音書・使徒言行録以外ではここでパウロが一度用いているのみで、異例の用例である。「秘められた計画をゆだねられた」は「ミステリーオン」の訳。「管理者(オイコノモス)」は、「家令」の意で、福音書の用例はルカのみである一方、「パウロ書簡」や「ペトロ書」では広く用例が見られる。パウロはおそらく、ここで、教え伝承の異なる人々を想定して、用語を言い換えながら説明しようとして試みているのだろう。
- ・3節「人間の法廷(アンテューローポス・ヘーメラ)の直訳は「人間の日」。同様の表現として1:8「わたしたちの主イエス・キリストの日」があり、3:13「かの日」同様、「日」を「裁きの日」を指す用法として解した意識。「あなたがたから」と区別されているが、1節「人(アンテューローポス)」は「あなたがた」と区別されていない。
- ・ここでパウロが「神の裁きの日」として想定しているのは、ユダヤ教ファリサイ派で広く認知されていた「終わりの日の復活信仰」と結びつけた「最後の審判」であろう。同様の発想に基づいた記述を、パウロは繰り返し記している(Ⅱコリ5:10など)。このような復活信仰は、主イエスも共有していたと考えられる。

福音書日課(ヨハネ 1 章より)

・日課箇所は、本福音書の本編の冒頭に置かれた洗礼者ヨハネに関する逸話の最初の部分。洗礼者ヨハネの紹介と主イエスとの関係(洗礼授与)を伝える逸話は、四福音書が共通して伝えているが、ヨハネ福音書だけが特異的に拡大した物語として展開させている。ヨハネ福音書の理解では、主イエスに最初に従った二人の弟子は、洗礼者ヨハネの弟子であった者たちであり、洗礼者ヨハネの指示によって主イエスに従うようになったものとされている(ヨハネ 1:35~40)。そのうちの一人は「アンデレ」であったと特定されているが、もう一人は匿名となっており、本福音書を生み出した「ヨハネ」であった可能性が示唆される。他の共観福音書が、主イエスと洗礼者ヨハネの関係を「受洗者と授洗者」という関係以上のものとしては示さずに曖昧にしていることに対して、より明確な関係性を提示しようとしているのだろう。ヨハネ福音書は、4 章でも、主イエスに従うようになった弟子たちが洗礼者ヨハネ同様の「洗礼運動」に携わっていたことを記している。

・日課箇所に描かれる「洗礼者ヨハネ伝承」の基本形は、共観福音書と共通しており、イザヤ書 40 章の預言に基づいて洗礼者ヨハネが位置づけられている。ただし、共観福音書とは異なり、このイザヤ書の預言を提示したのは、洗礼者ヨハネ自身であったとされている。一方で、ヨハネ福音書は、洗礼者ヨハネが自身を「エリヤ」や「預言者」と同定する見方を否定していた、としている。これは、共観福音書で主イエスが洗礼者ヨハネを事実上「エリヤ」とみなし、また「最後の預言者」と位置付けようとしていることと異なる。ヨハネ福音書(を作成したヨハネの教会共同体)には、当時ペトロらを中心に形成されつつあった主流派教会共同体で流布していた「洗礼者ヨハネ」の位置づけに対して、異論があったのだろう。

来週の誕生日 (12 月 17 日~23 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-240 番「主イエスは近いと」(II 48「主イエスは近しと」)は、古代ミラノ司教アンブロシウスの作詞とも言われるが、6 世紀の作詞者不詳の詞。19 世紀にモックによって作曲された曲がつけられてから、英国教会系の讃美歌集で広く歌われるようになったアドヴェントの讃美歌。
- ・21-241 番「来たりたまえわれらの主よ」は、「Swiss Noel(Noël Suisse)」という曲名で 16 世紀以来、スイス・フランス国境地方で歌われてきた「ノエル」のひとつ。フランス語圏では、降誕節に演じられた降誕劇のためにさまざまな「ノエル」が歌われてきた。
- ・21-233 番「高く戸を上げよ」は、詩編 24:7 に基づいて 17 世紀プロイセンの牧師ヴァイセルが作詞。18 世紀に敬虔派の讃美歌集で現行の曲がつけられて以降、ドイツを代表する讃美歌として歌われてきた。現行ドイツ讃美歌集 1 番。

21-240「主イエスは近いと」**Vox clara ecce intonat**

1. Vox clara ecce intonat, / obscura quaeque increpat: / procul fugentur somnia; / ab aethre Christus promicat.
2. Mens iam resurgat torpida / quae sorde exstat saucia; / sidus refulget iam novum, / ut tollat omne noxium.
3. E sursum Agnus mittitur / laxare gratis debitum; / omnes pro indulgentia / vocem demus cum lacrimis.
4. Secundo ut cum fulserit / mundumque horror cinxerit, / non pro reatu puniat, / sed nos pius tunc protegat.
5. Summo Parenti Gloria / Natoque sit victoria, / et Flamini laus debita / per saeculorum saecula. Amen.

21-241「来たりたまえわれらの主よ」**O Dieu du clemens**

1. O Dieu de clémence, / Viens par ta présence, / Comblér nos désirs, / Apaiser nos soupirs. Sauveur securable, / Parais à nos yeux, / A l'homme coupable / Viens ouvrir les cieus; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
2. O bonté divine! / Dieu vers nous s'incline; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance! / C'est la délivrance!
3. Un dur esclavage / Fut notre partage: / De tout l'univers / Il vient briser les fers. Loin de sa presence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
4. Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieus! Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour; / Et que par le monde / Toute voix réponde:

21-233「高く戸を上げよ」**Macht Hoch die Tur**

1. Macht hoch die Tür, die Tor macht weit; / es kommt der Herr der Herrlichkeit, / ein König aller Königreich, / ein Heiland aller Welt zugleich, / der Heil und Leben mit sich bringt; / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Schöpfer reich von Rat.
2. Er ist gerecht, ein Helfer wert; / Sanftmütigkeit ist sein Gefährt, / sein Königskron ist Heiligkeit, / sein Zepter ist Barmherzigkeit; / all unsre Not zum End er bringt, / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Heiland groß von Tat.
3. O wohl dem Land, o wohl der Stadt, / so diesen König bei sich hat. / Wohl allen Herzen insgemein, / da dieser König ziehet ein. / Er ist die rechte Freudensonn, / bringt mit sich lauter Freud und Wonn. / Gelobet sei mein Gott, / mein Tröster früh und spat.
4. Macht hoch die Tür, die Tor macht weit, / eu'r Herz zum Tempel zubereit. / Die Zweiglein der Gottseligkeit / steckt auf mit Andacht, Lust und Freud; / so kommt der König auch zu euch, / ja, Heil und Leben mit zugleich. / Gelobet sei mein Gott, / voll Rat, voll Tat, voll Gnad.
5. Komm, o mein Heiland Jesu Christ, / meins Herzens Tür dir offen ist. / Ach zieh mit deiner Gnade ein; / dein Freundlichkeit auch uns erschein. / Dein Heilger Geist uns führ und leit / den Weg zur ewgen Seligkeit. / Dem Namen dein, o Herr, / sei ewig Preis und Ehr.